



県立広島大学 Prefectural University of Hiroshima

地域連携センター報

Vol. **25**

COMMUNITY LIAISON CENTER

平成29年10月27日発行

県立広島大学地域連携センター

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号 電話082-251-9534 E-mail:renkei@pu-hiroshima.ac.jp

第一回国際産学連携交流会

第一回国際産学連携交流会（主催：本学地域連携センター 後援：中国経済産業局・ひろしま産業振興機構・チャイナエアライン広島支店）を、平成29（2017）年2月16日の午後、県立広島大学2317講義室と講義室前のフロアにおいて、9件の発表と15件のパネルによるセッションで実施しました。発表では特許等を有する最先端研究、産学連携実績のある研究を、パネルセッションでは、健康を主なテーマに各学部等の特色ある研究を紹介しました。なお、4件の発表は英語で、1件の発表には中国語通訳がありました。パネルも一部英語で作成しました。

発表においては、本学国際交流センターのプログラムで本学を訪れた台湾人留学生6名（台湾大学・世新大学・亜東技術学院）、引率教員1名も参加し、彼らも含めフロアから、ハッカー対策、産学連携の推進方法、事業資金の集め方、実験方法の妥当性まで積極的な質疑応答が英語や中国語、日本語で行われました。パネルセッションでも留学生や産学連携関係者から各パネルに質問が出るなど熱心なやり取りが行われ、研究内容を広島県内の企業へ紹介する等の成果もありました。

参加者数は、ひろしま産業振興機構、チャイナエアライン、広島県環境保健協会、県内企業、自治体等関係者、広島大学、本学学長、副学長をはじめとする本学教職員、本学留学生、本学日本人学生など54名でした。産学連携交流会実施後、懇親会を実施し、本学の産学連携、国際交流の在り方を引き続き話し合うなど30名を超える本学内外の関係者間で交流を深めました。

国際産学連携交流会は、本学国際交流センターの補助事業として台湾からの学生と本学との交流の一環をなすものでした。当該交流会までに、台湾からの教員、学生は広島、庄原、三原の特徴ある研究施設や図書館、センター等を訪問し、本学への理解を深めました。また庄原の学生とは自分の研究や将来について意見を交換する時間も持ちました。宮島や平和記念資料館等も訪問し、広島県への理解も深めました。2月は県北に雪も多く残っており、それも台湾の学生の心に残ったようです。なお、台湾人留学生は第一回国際産学連携交流会も含めて本学訪問について英語もしくは日本語でのレポートを提出しました。

大学、学生との交流を通じて、国際的に産学連携を引き続き広げていきたいと、地域連携センターでは考えています。今年度は韓国の大学との連携のもと、韓国の学生も交えて第二回国際産学連携交流会を後期に実施する予定です。多くのご参加をお待ちしています。



発表会場の様子



パネルセッション会場

広島キャンパス

HIROSHIMA CAMPUS

産学連携

広島県IoT人材育成セミナー

平成28年11月に高度人工知能プロジェクト研究センターが設置され、最先端の研究成果を地域の皆様に還元する活動を進めています。3月16日サテライトキャンパスにて、広島県IoT人材育成キックオフセミナーを県立技術短期大学校と共催で開催しました。本年度は、広島県内企業のIoT人材育成セミナーを6日間に亘って講演及び実習形式で開催しております。

1回目はIoT概論（経営情報学科 重安哲也准教授）、2回目はデータ処理～サーバ構築、セキュリティ編～（経営情報学科 佐々木宣介准教授）、データ処理～統計・人工知能・深層学習によるデータ処理編～（経営情報学科 市村匠教授）の講義を本学複数教員が担当しました。3～5回目は県立技術短期大学校が実習編を行い、最終回は学びを通じて企業が成果発表会を実施し、市村教授が総評を行いました。

1～2回目の講演では、主に県内企業等から延べ227名の参加者があり、基礎的な通信技術、セキュリティ、統計処理、人工知能の手法を始め、最先端の深層学習研究成果を熱心に聴講していました。

本年度10月以降にも、今回のセミナーの参加者からの要望を取り入れた形で、IoT人材育成セミナーを予定しています。



市村教授の講演



講演会場の様子

講演会

国際関係シンポジウム

6月5日に、米国でのトランプ政権誕生を機に世界的に注目が集まっている米国と東アジア諸国の関係を中心に、米国、中国、台湾、韓国の事情に精通した、福岡政行氏（本学客員教授）、藤野文悟氏（富山県環日本海経済交流センター長）、原田環氏（本学名誉教授）、上水流久彦氏（本学庄原地域連携セン

ター准教授）の4氏が各国の政治・経済・社会情勢について講演を行い、続いて角倉博志氏（一般財団法人ひろぎん経済研究所理事長）をコーディネーターとして、そのような情勢下における企業・団体の行動を考えるパネルディスカッションを行いました。



パネルディスカッションの様子

各講師から多様な視点からの情勢分析、意見紹介があり、参加者からは報道ニュースでは知ることができなかった原状、国際情勢の不透明感を知ることができて大いに参考になったと好評でした。

公開講座

頭と体をフル活用！ 簡単エクササイズ講座

4月13日、廿日市市との連携公開講座「頭と体をフル活用！ 簡単エクササイズ講座」を廿日市市総合健康福祉センターで開講しました。

講師の先生からは無理のないストレッチやトレーニングをわかりやすく教えていただき、簡単なステップを習ってエアロビクスを楽しみました。22名の方々が参加され、笑顔でいい汗をかくことができました。参加者からは、「家でもできるストレッチを習ったので、続けようと思う。健康につながる講座に参加でき、勉強になった」、「リズムカルな動きで筋力が鍛えられることの大切さを認識した」、「日頃から年齢に応じて身体を動かす必要があると思った」、「とてもよかった。また、参加したい」などの声がありました。



エアロビクスの様子

前期は、このほか、広島市文化財団との連携公開講座「憲法を学ぶ」、「毛利元就周辺の群像」、「お子さま連れて学べるマネジメント基礎講座」、ひろしま美術館との連携公開講座「ピーターラビット™を巡って」、広島市立大学との連携公開講座「ひろしま学を考える」、広島県立図書館との連携公開講座「鏡が映し出す日本の文化」、本学単独主催の「ひろしまの英学：明治期の英語教科書を読む」、「情報セキュリティマネジメント試験対策講座」を開講しました。

研究紹介

くずし字から広がる世界

人間文化学部国際文化学科 講師 高松 亮太

箸袋の「おてもと」や看板の「生そば」などの字が、ニョロニョロとした文字で書かれているのを見たことがある人も多いのではないのでしょうか。これらの文字を経験則で読むことはできても、なぜそう読むのか問われたとき、答えられる人はそう多くはないでしょう。こうした文字は「くずし字」や「変体仮名」などと呼ばれ、明治33年（1900年）の小学校令施行規則で、小学校で教えられる仮名の字体が一字体に統一されるまで、一般に読み書きされてきたものでした。つまり、つい100年ほど前まで誰もが理解できていた文字を、現代の人々にはもはや読むことすら困難になってしまっているのです。



しかし、今こうしたくずし字に対する人々の関心が高まっています。その目的はさまざまですが、くずし字を読む公開講座は、いつも熱心に解説に取り組む方々で溢れています。また、中学生や高校生には文法嫌い・古典嫌いの生徒も多いのですが、出前授業でくずし字を教えてみると、ほとんどの生徒が目を見開かせ、そこから古典への興味・関心を抱くというケースも少なくありません。

くずし字を通して〈古典〉に接することで、その豊かな世界を存分に享受し、人生を豊かにする人が一人でも増えてほしい。そうしたささやかな希望を抱きながら、これからも多くの方々にくずし字の意義と魅力を発信し続けていきたいと考えています。

気の利く情報システムの開発

経営情報学部経営情報学科 講師 岡部 正幸

近年、スマホなどの電子機器にはパーソナルアシスタントと呼ばれる機能が搭載され、探し物やスケジュール管理など私達の日常生活におけるちょっとした作業をサポートしてくれるようになりました。このような機能は、機械学習と呼ばれる技術に支えられており、コンピュータ自身に人とのやりとりから正しい行動を学ばせることで、より高機能なものへと進化させていくことができます。



私が行っている研究は、この機械学習をコンピュータに行わせるためのプログラム開発と応用システムの試作です。機械学習によってコンピュータを賢くするには、人間が行う学習と同じように、質の良い例題（データ）を与え、苦手な問題（判断のつかないデータ）を明らかにし、時には複数人で相談させる（集団学習による多数決判断）など、色々と手をかける必要があります。また、このような作業を専門家以外の人でも行えるようにするための仕組みを考えることも重要です。

学習機能を持ったコンピュータは便利なため、今後社会において広く用いられ、コンピュータに求められる賢さも多様になっていくと考えられます。私が現在研究している、人の意図を汲んで気の利いた判断をしてくれる機能、重要な判断を行うときには、その判断基準を説明してくれる機能もそのような賢さの一つです。

広島地域連携センターが新しくなりました

4月から地域連携センターの体制が大きく変わりました。事務組織が拡充され、URA（University Research Administrator：大学研究支援職）1名を含む4名の事務職員が地域連携センターの業務に従事しています。

地域連携センターの体制を強化し、センター教員と事務職員が協働して、地域の企業との共同研究や地域課題解決等に取り組んでいます。

これまで以上に、地域の皆様との連携を密にし、地域の方に本学シーズを有効に活用していただきたいと思いますので、今後ともどうぞよろしく申し上げます。

庄原キャンパス

SHOBARA CAMPUS

産学官連携

しょうばら産学官連携推進機構

6月1日に当機構の理事会・総会をかんぼの郷庄原にて開催致しました。約30名の出席者のもと、すべての議案について原案どおり承認されました。

今年度の事業方針は産学官連携の基礎である「マッチング」事業を特に重点的に進め、新たな助成金制度や農商工連携に取り組んで参ります。加えて、金融機関や関係団体等との連携を強化し、より成果の創出を意識した事業展開を図ります。

「プロジェクト事業」においても、「企業と大学をつなぐ」という根幹部分を重視し、シーズの発信及びニーズの掘り起こしを積極的に行い、新たなマッチングを創出させる取り組みを行います。



三次イノベーション会議総会

5月30日に三次市役所にて開催しました。本会議は三次市の産学官連携推進を目的に、三次市、三次商工会議所、三次広域商工会、本学が構成員となっています。総会では事業計画が原案どおり承認されました。例年行っている本学教員紹介、大学共同研究助成等に加え、昨年度、本学学生と共に実施した産業活性化の研究調査プロジェクトを継続して行うことが紹介されました。



公開講座

庄原市民公開講座

「『摩擦』で人間社会を知る」をテーマに、庄原市教育委員会と本学との共催で6月27日、7月4日、14日、20日に実施しました。国家間の摩擦、人間どうしの摩擦、摩擦が生じる原因、摩擦の解消方法、環境との摩擦など、摩擦を多様な角度から取り上げました。全体として摩擦と上手に付き合う方法を知ることができたのではと思います。延べ104名の市民が出席され、3回以上出席された25名の方に修了証書を渡しました。4回目の講座終了後のアンケートでは多くの方が「良かった」と回答され、満足度も高いものでした。後期の庄原市民公開講座では「ふるさと」を切り口に庄原を取り上げる予定です。



回	講座名	講師
1	東アジアの国際関係にみる摩擦を読み解く	地域連携センター 准教授 上水流久彦
2	コミュニケーションにおける誤解(摩擦)はなぜ生じるのか	生命環境学部 教授 坪田 雄二
3	人との摩擦に疲れたら自然を利用してリフレッシュ	保健福祉学部 教授 田中 聡
4	人間と自然環境の関係(摩擦)から人間社会を知る	生命環境学部 准教授 崎田 省吾

本学主催成功事例講座

本年度あらたに「産学官連携事業の成功事例に学ぶ」と題した講座を庄原キャンパスで始めました。地域や企業と連携しながら事業を展開している本学教員を講師に、その秘訣や課題を参加者と共有し、地域の発展に寄与することを目的にしているものです。その最初となる今年度の講座は7月7日に開催しました。講師は、いのしし等の被害削減の研究を庄原市の相談に応じて行った三苦教授、広島県が重点的に取り組むレモンを題材に骨粗しょう症予防に取り組んだ飯田教授です。三苦教授からは、地元企業や自治体、関係者からの意見を真摯に受け止めて事業を行っていく重要性を、飯田教授からは、食品を扱う場合の注意点や大企業と行う場合に意識しておく点などを学ぶことができました。講座参加者は延べ33名で、2回ともに受講した13名に修了証書を渡しました。大変満足、満足の声が8割を超えており、良い講座となりました。来年度以降も本学の産学官連携の成功事例をご紹介するかたちで、地域振興への貢献を行いたいと考えています。

回	講座名	講師
1	産学官による獣害対策への対応 庄原市との連携事例から	生命環境学部 教授 三苦 好治
2	レモンを活用した健康増進 ポッカサッポロとの連携事例から	保健福祉学部 教授 飯田 忠行

言語文化生涯学習講座

3月6日から9日の4日間、本学庄原キャンパスにて標記講座を行いました。11回目を迎えた今回の講座では、「これからの『知』を考える」をテーマに、庄原キャンパス所属の教養教育を担当する講師が、哲学・教育・言語・文化の「知」を題材に語りました。夜間の開催で、悪天の日もあるなか、延べ32名の参加がありました。

回	講座名	講師
1	古典作品を読む-プラトン『メノン』(3)	総合教育センター 准教授 大草 輝政
2	英語圏の政治漫画を通じて 2016年を振り返ろう	生命環境学部 准教授 R.スチュワート
3	国際学力調査からみる日本の教育	生命環境学部 准教授 藤井 宣彰
4	英学の痕を辿る:教材の書き込みを頼りに	生命環境学部 教授 馬本 勉

研究紹介

文化を通じて地域や社会を考えています

地域連携センター 准教授 上水流 久彦

地域連携センターで地域と大学をつなぐ業務を行っています。地域の活性化を目的に本学教員と地域を結ぶなかで上水流自身も一緒に調査することが多く、これまでに安芸灘とびしま海道の研究や世羅町のコメを台湾に輸出する研究などに携わってきました。そのなかで観光振興や地域ブランド、農商工連携に関心を持つようになりました。従来の専門は文化人類学で、台湾を中心に東アジアを主な調査地にしています。異なる文化の研究というところから、安芸高田市の多文化共生政策にも長年関与し、安芸高田市の中学生を対象に異文化理解入門講座も行っています。



専門の研究ですが、具体的には、石垣と台湾、対馬と韓国との交流などを研究し、外国人観光客と現地の人々とのすれ違いについて調査してきました。最近、尖閣諸島をめぐる国家間関係を関係者のインタビューを通じて明らかにしたり、日本統治時代の建築物が台湾、韓国、旧満州の中国東北部でどう扱われているかという観点から日本認識の研究を行っています。いずれも自己と他者が交わる場に注目し、異文化摩擦や他者理解の問題について考察しています。

担当する文化人類学の授業では、レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンナーの頭文字をとったLGBTや一妻多夫婚など様々な結婚と家族の有りよう、社会的性差などを通じて、自分たちの「常識」が持つ問題点を学生に問いかけ、よりよい住みやすい社会について考えてもらっています。

平成29年度

農商工連携促進地域実施事業

「平成29年度農商工連携促進地域実施事業」は、経済産業省が株式会社ジェイアール東日本企画に委託して、平成29年度より新たに行われる事業です。商工関係の中小事業者と農林漁業者が有機的に連携し、それぞれの経営資源を有効に活用する農商工連携の取組を促進するものです。農林漁業者のニーズを中小事業者のシーズと上手く組み合わせることにより、農商工連携による新事業を創出することを目的に実施します。

庄原商工会議所が、「平成29年度農商工連携促進地域実施事業」に対して申請を行った結果、採択となりました。

本事業では、①農林漁業者のニーズ・中小事業者のシーズの収集、②農林漁業者と中小事業者のマッチング、③継続的なマッチング：マッチングサポート及びフォローアップ（成果目標の達成）、④マッチングサポートなどを実施していきます。

本事業の特色として、「しょうばら産学官連携推進機構」（以下、機構）の存在があげられます。機構の幅広いネットワークやマッチング活動のノウハウを最大限に活用し、庄原市内の農業者と商工業者のマッチング及び、本学の研究シーズを活用した現場等の課題解決を図ることを試みます。

本学も、県内農業関係のニーズに対して期待に応えるべく対応していきたいと思っています。

地域連携 世羅町地域戦略協働プロジェクト

平成28年度の世羅町地域戦略協働プロジェクトでは「空き家」対策がテーマでした。現在では、空き家問題は世羅町に限ったことではなく、都市部でも見られる普遍的な問題となっています。平成28年度は先行事例の分析と聞き取り調査を実施しました。大見地区での聞き取り調査では、学生も参加しました。

空き家問題では、移住希望者がいても家の売り主を探すことが困難であることがあげられました。故郷への思い入れの他にも、仏壇や家財道具が残っていることや山林や畑はどうするのかといった物理的な問題も指摘されています。移住希望者のニーズにあった家を

提供するためには、解決できる問題を探り出し、解決方法を提示することが求められています。平成29年度は、この点について取り組む計画です。



三原キャンパス

MIHARA CAMPUS

公開講座

プレイバックシアター(三原シティカレッジ)

プレイバックシアターは、現在50か国以上で実践され、教育・医療福祉・子育て・男女共同参画などの分野で活用されています。三原地域連携推進協議



会と連携し、地域の方々へ本学の知的財産の提供を目的として開催している三原シティカレッジにおいても、昨年度及び本年度に講座を開催しました。6歳から60歳代までの方が参加し、身体を動かしながら、お互いを理解し合ったり、気持ちを音と動きで表現したりといったエクササイズなどを行いました。

プレイバックシアターの主な手法であるストーリーは、コンダクター(司会進行役)、アクター(役者)数名、ミュージシャン(音楽担当)、により上演される即興劇です。コンダクターが観客の中からテラー(体験を話す人)を招きインタビューします。その後アクターが語られた場面を即興で演じ、ミュージシャンがストーリー展開や場面に合わせた音楽を演奏し、テラーがコンダクターのインタビューに答えながら自分の過去の経験を語る中で、当時の状況を振り返ります。アクターたちは、ストーリーの登場人物を演じるために真剣にテラーの話を聞きます。観客たちは、テラーのストーリーを劇として見ることで、ストーリーがもつメッセージを受け取ったり、自分の経験と照らし合わせたりします。その結果、その場にいる人たちの中に、共感や気づきが生まれます。こうしてできあがったコミュニティには、お互いを肯定的に理解し合う雰囲気が生まれます。

本学では、作業療法学科の学生の臨床実習での経験を共有するために、プレイバックシアターを行っており、大学院の医療福祉倫理学特論では、実践現

場での悩みやディレンマを解明する手法として取り入れています。

プレイバックシアターを実践するためにはトレーニングが必要なので、平成26年から本学教員有志が中心となり「劇団しましま」を設立し、研鑽しています。11月3日から5日にかけて三原キャンパスにおいて、アジア太平洋大会が開催されます。

地域貢献

認知症カフェ

認知症カフェをご存知でしょうか？これは認知症の人と家族、専門家や市民が気軽に集まり、和やかな雰囲気のもと交流を楽しむ場のことで、オランダのアルツハイマーカフェが起源となっています。認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)では平成30年度までに全ての市町村に設置することが目標となっており、三原市では5つの地域包括支援センターがそれぞれの担当地域で認知症カフェを月に1回開催しています。作業療法学科の教員と学生は、そのうち2か所を支援しています。

1つは三原駅前のはるのんCafeで開催されている「のんどりカフェ」で、ここは毎月第3金曜日の午前中に1時間半オープンしています。特徴は、おしゃれで温もりのある雰囲気の中で本格的なコーヒーが飲めることや、ギターの生演奏が聴けることです。認知症の人と家族の会の方が参加され、介護に関する助言や温かい声かけを家族にして下さっています。

もう一つは地域包括支援センター三原市医師会の建物内で開催されている「すずらんカフェ」で、ここは毎月第1金曜日の午後2時間オープンしています。特徴は外部講師による認知症予防などのミニ講座、市民ボランティアによるイベントが積極的に行われていることです。7月には宇根山天文台の職員の方が天の川や星に関するミニ講話や、ギターを弾きながらオリジナルの曲を披露して下さいました。

いずれの認知症カフェでも季節に合わせた行事や工作を行っており、ボランティアとして参加した学生は、これらの活動を手伝ったり、他の参加者と交流したりしています。認知症の当事者と家族にとって学生との交流はとても良い気分転換になっているようで、「若い人から元気をもらった」という言葉をよく耳にしますし、参加した学生にとって学修意欲を高める良い機会になっているようで、「家族の思いや愛情に感動しました」という話をよく聞きます。

平成27年度の作業療法学科卒業研究の調査では、認知症カフェが家族にとって気持ちの共有、安らぎや楽しみの場となっていること、社会的孤立を解消する場及び介護意欲を引き出す場になっていることが分かりました。



認知症をもつ人の介護で心配や悩みのある方は、是非お近くの地域包括支援センターを通して、認知症カフェに気軽に参加してみてください。

研究紹介

地域包括ケアシステムをはじめとする 予防分野における理学療法士の役割

保健福祉学部理学療法学科 助教 積山 和加子

理学療法士は様々な原因により運動機能が低下した方を主な対象としてリハビリテーションを提供する専門職ですが、近年では高齢者の介護予防や労働者の労務災害予防など予防分野における活動も積極的に進んでいます。

地域包括ケアシステムの中で、健康な高齢者が介護予防サービスの支え手として活動することは高齢者自身の健康寿命の延伸にもつながるため、各自治体において様々な事業を展開しています。理学療法学科では県立広島大学地域戦略協働プロジェクトとして、尾道市における介護予防事業の効果を検証しています。尾道市では介護予防体操を普及させるための体操指導士を高齢者の中から養成し、体操指導を通じて住民相互の心身機能の改善を図る事業を実施しています。平成28年度は体操教室の実践により指導士自身の心身機能の改善効果があることを明らかにしました。平成29年度も調査を継続し、体操指導という介護予防活動が高齢者自身ならびに地域住民に与える影響について検証を進めていきたいと考えています。

また、高齢者の介護予防を図る上で尿失禁対策も重要です。尿失禁自体は生命を脅かすような障害は生じませんが、QOL（生活の質）を著しく低下させてしまいます。尿失禁が生じる原因として、骨盤内にある骨盤底筋群と呼ばれる筋肉の筋力低下が挙げられます。現在は基礎研究を中心としていますが、運動が骨盤底筋群に与える影響や筋力低下を予防する対策について研究を進めています。

一方、高齢者以外の予防分野として労働者の腰痛予防があり、平成27・28年度は広島県の郷土食であるお好み焼き調理従事者の職業性腰痛の実態調査と腰痛予防に向けた研究を行いました。アンケート調査の結果、お好み焼き調理従事者の腰痛有訴率は60%を超えており、他の調理従事者よりも高いことが分かりました。次に、腰痛予防対策を考案するために、お好み焼き調理動作が腰部筋活動に及ぼす影響について検討を行いました。これまで調理作業において最適とされていた調理台の高さよりも、お好み焼き調理の場合は調理台を高く設定した方が腰部への負担が少ないことが分かりました。労働者の腰痛は産業衛生上重要な問題ですが、その作業内容により予防対策は異なることから各業種特有の課題を検討した上で対策を講じていく必要があると考えています。



理学療法の対象となる分野は広がりを見せており、今後さらに新しい分野へと拡大することが予想されます。社会的ニーズが多様化する中で対象者の方々がより良い生活ができるよう支援していきたいと考えています。

地域連携センター長 ごあいさつ

地域連携センターでは、地域に貢献していくために産学官連携や学術広報、生涯学習の支援などを行っています。今年度より、各キャンパスにて新たな地域連携センター長が就任し、体制が変わりました。

地域連携センター長 市村 匠(再任)

2期目のセンター長を拝命しました。この間、地域戦略協働プロジェクトの追跡調査、産学官連携の強化、多様な公開講座の開講を図ることで、大学と地域を結ぶ役割を担ってきました。本学としては初めてのURA（リサーチ・アドミニストレーター）が入りました。地域、産業界、自治体との連携を担うセンターとして、今まで以上に活発に活動します。教職員の皆様、学外関係機関諸団体の方々にはご支援を賜りますようお願い申し上げます。



広島地域連携センター長 朴 唯新(新任)

今年度新しく広島地域連携センター長になりました朴唯新です。皆様をご存じのように、本学の経営理念は「地域にねぎらった県民から信頼される大学」であり、地域連携センターはその理念を実現するために、主に①共同研究・委託研究、②相談事業、③産学官連携のための交流、④キャンパスの特色を活かした地域貢献・連携に取り組んでいます。今後広島地域連携センターは皆様とともに上記の使命を果たすことで、地域の活性化に努めてまいります。



庄原地域連携センター長 入船 浩平(新任)

本年4月より庄原地域連携センター長に着任しました。前2年はフィールド科学教育研究センター長として、特に備北の方々とは教育面で様々な繋がりを持つことができ、貴重な経験ができました。今後は、包括協定の市町に限らず広く県内の多くの方々に関われるのを楽しみにしております。大学と地域、人と人を繋ぐ大切な役割と認識し、本センターの上水流准教授の助けを借りながら責務を果たしたいと思っております。よろしくお願いいたします。



三原地域連携センター長 田中 聡(新任)

三原キャンパスの業務の中心は、包括協定を締結した自治体や団体との連携に加え、県民を対象とした公開講座や三原シティカレッジの開催があげられます。昨年度は延べ733人の参加があり、今年度も16講座を開講し生涯学習の場として定着してきました。また、本キャンパスは、保健・医療・福祉のスペシャリストを有しており、今後注目され具体的な変革が求められる「地域包括ケアシステム」の構築や諸問題に向けて支援していきます。加えて地域課題や産業界からのニーズに丁寧に対応していきますので、皆さまのご協力をお願いいたします。



地域連携センター報は本学ホームページにバックナンバーを掲載していますので、ご活用ください。地域連携センターの活動についても、あわせてご覧ください。

<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/renkei/>

編集後記

地域連携センター報第25号をお届けします。本号では、台湾からの学生も参加した「第一回国際産学連携交流会」についてご紹介させていただきました。今年に入ってから各キャンパスで取り組んできた地域連携に関する活動や講座、研究もあわせてご案内しています。

センターの体制は変わりましたが、今後とも引き続き、地域に貢献できるよう取り組んでまいりますので、ご支援、ご協力をいただけますようお願いいたします。

編集発行

県立広島大学地域連携センター

〒734-8558 広島県広島市南区宇品東一丁目1番71号
電話(082)251-9534 / E-mail: renkei@pu-hiroshima.ac.jp
<http://www.pu-hiroshima.ac.jp/soshiki/renkei/>

各キャンパス問合せ先

県立広島大学庄原地域連携センター [本号編集担当]
〒727-0023 広島県庄原市七塚町5562番地
電話(0824)74-1704 / E-mail: gakuju@pu-hiroshima.ac.jp

県立広島大学三原地域連携センター

〒723-0053 広島県三原市学園町1番1号
電話(0848)60-1200 / E-mail: mrenkei@pu-hiroshima.ac.jp